

# 程極明 著 『洪流』

連載第二回 (5〜9)

抄訳 井手淑子

## 《これまでのあらすじ》

1937年7月の盧溝橋事件の時、主人公の小宝は8歳の小学生。8月からの日本軍の南京空爆は日増しにひどくなり、一家は10月末に、長江沿いの蕪湖に逃れた。しかし日本軍の作戦変更により、街は十日十晩焼かれた。

その間に南京では、12月13日から6週間、市内に入った日本軍により、多くの無辜の市民が老若男女を問わず殺され、死体は長江にあふれ、通りにも凍ったまま長く積み上げられた。(いわゆる南京虐殺)。

当時南京にいたドイツ、アメリカ、イギリスなどの外国人が安全区を設け、避難民を助けた。しかし、そこも安全ではなく、やってきた日本兵が多くの若い女性を連れ去り、強姦し、恥辱にまみれた彼女たちは、長江に身を投げ、戻っては来なかった。

小宝一家は翌年の春、すっかり荒れ果てた南京に戻った。中国の未来に不安をもつ若者たちは、仲間を求め、グループを結成したり、中国共産党やその指導下にある新四軍などの抗日組織へとつながりをもとめていった。小宝の姉、秀華と友人たちも、高校生としてその輪の中に入ろうとしていた。

\*連載第一回(1〜4)はホームページ「時事評論・エッセイ」欄・第11回(2016年10月)でご覧いただけます。

## 5 小宝の姉、秀華

1938年の春節後、林家の一行は南京に戻ることにになり、店員の小王は借家を探し家具をそろえた。一行は、見渡す限り荒れ果てた南京に戻った。道には誰もいず、街路樹の梧桐は葉を落とし、冷たい風に蕭蕭と鳴っていて、あたかも苦難にあえぐ人々の泣き声のようだった。小宝はすぐに祖母の家に行き、従兄の希鷹と語り合った。二人の小学校は別々だったが、日曜日には一緒に遊んだ。

金女大の難民避難所は役目を終え、華女史は多くの中国人から「生き仏」と言われたが、この美しい校庭と職員を守るため、付属の中学校を作り、全寮制によって女学生の安全も図った。小宝の二番目の姉、秀

華も入学した。

秀華にはこの学校はまるで宮殿のように感じられた。美しい緑の芝生、ホール、光沢のある床……。そして校舎の前の広い芝生に、一本の小さな道があるのが目に入った。それは、当時1万人以上の難民が毎日お粥をもらいに通った道であり、彼女が学校を卒業するまでずっと草が生えなかった。それは彼女に、

あの悲惨な日々を忘れてはいけな  
いと注意を促してくれた。

華女史は本名ミニ・ヴェトリン。  
イリノイ大学を卒業後、伝道と学校  
開設のために中国にやってきた。1  
919年以来ずっと金女大で働く。  
特に抗日戦争で、校長が後方に撤退  
してからは南京の学園を守る責任  
を負った。

彼女は学生には愛情深く、かつ厳

しく接した。毎日学生と食堂で昼食  
をとり、学生たちの状況を理解し、  
かつ彼らの会話の訓練をした。校内  
に野菜畑を開墾し、学生たちに世話  
をさせた。また食後の茶碗洗いや食  
堂の掃除もやらせた。更に学生たち  
が人々の生活を理解するよう、定期  
的に、近所の貧しい子供たちにお粥  
を施した。

秀華はそれを手伝った日の夜は、  
よく眠れなかった。ガツガツと食べ  
る子、一杯食べたらもう一杯と要求  
する子らの光景に彼女の心は痛ん  
だ。

学生たちはみな華女史が好きで、  
彼女の言行や学校の環境にも大き  
く影響されていたが、宗教問題では  
どうしても共に語れなかった。彼女  
たちは礼儀正しく授業を聞き、聖歌

隊にも参加していたが、多くのもの

はキリスト教を受け入れなかった。

英語力もある秀華は、友人らと華

女史に問いかけた。「神が万能であるなら、神はなぜ日本帝国主義を処

罰しないのか?」「汝の右の頬をぶたれば、左の頬を差し出せというが、私たちは日本鬼子にもそうするのか?」など、華女史には答えようがなかった。

## 6 姉の友達と《七姉妹》

小宝の姉の秀華は、金女大付属中の比較的自由な環境の中で、外国の放送・新聞や重慶テレビなどに接し、戦局の状況を知り、友人もできた。

一人は江小英。母は幼い頃に童養媳として売られ、南京に逃げてきたという。父は出稼ぎに出たっきりで、

母の住み込み先の金女大教授の励

ましによって、ひたすら勉強し、首席で入学、奨学金を得た。

秀華は初めて彼女の家を訪ねた時、呆然とした。

窓もない部屋に一台の木のベッド、テーブルと2個の丸椅子。ドアの前に鍋が一つ。

なぜ自分の家は豊かなのか?なぜ彼女の家があんなに貧しいのか? 世の中はどうしてこんなに不公平なのか? 色々と考えさせられた。

もう一人は武志華。父は役所の事務員。ショートカットで男の子風にしていた。もし自分が男の子だったら、出産・育児・家事にも関わらず、軍にも参加できるのに! 日本鬼子と必死に闘えるのに!と考えていた。

三人は他の四人のクラスメート

と《七姉妹》という愛国的グループを秘かに結成し、戦局についてのデイスカッションもよくした。

1940年の夏休みを郷里の常州で過ごした武志華は、小学校教師の康琴と隣り合わせになった。休暇中に度々会い、《七姉妹》のことなどを話すようになった。年上の康琴は彼女たちの自発的な行為に感心しつつ、少数の積極的分子で、多くの学生とつながりはなく、政治的志向性もないが、これらの青年学生の中にも、抗日闘争への積極性が埋もれていることをつかんだ。

彼女は最後に、自分が新四軍中共地区委員会の幹部であることを明かした。

康琴は《七姉妹》のメンバーにそれを伝えた。そして彼女は小学校教師として南京に来ることになった。

こうして中国共産党が抗日下の南京に設立した最初の地下党組織、南京市特別党支部が誕生した。

1941年の冬休み、江小英が最初の地下黨員となった。彼女が一晚中眠らずに考えたことー小さい頃よくお腹がすぎ、夜中に目が覚めたこと、貧乏で三人の兄の病気を治せず、両親が近くの山に埋めたこと等。更に祖国が遭遇していること。

たくさんの人が日本鬼子に連行され、埋められたこと。多くの婦女が強姦され自殺したこと。これから自分は、母の娘というだけでなく、共産党という母の娘、女戦士であると思った。

もう孤立した一人の女の子ではなく、多くの隊列の一人の兵士であること。

まもなく、武志華も入党し、日本

統治下の南京に小さな灯がともされた。

どうすればいいか話しているんだ。』と前置きして、二人の「初めての抗日の闘い」を話した。

## 7 初めての上海

汪精衛政府が成立した日のこと。

日本軍は南京占領後、国民政府の投降派と手を結び、やがて1940年3月、汪精衛が南京に「国民政府」を設立した。

それぞれの小学校の壁に、「日本帝國主義打倒！」「売国奴汪精衛を打ち倒せ！」「中華民族万歳！」とたどたどしい文字の一枚のスローガンが貼られた。誰も破るものはいなかった。二人は、みんなの反応をみて喜んだ。

用の父について初めて上海に行った。大叔父さんの家で従兄の希虎に会った。有名な江蘇省立上海中学校（省上中）に通う高校生である。

『君たちはホント、たいしたものだな。そんな若い年齢で闘い始めるとは。でも、みんながすべに闘いに参加すると期待してはいけないよ。慎重にな！』と興奮して言った。

希虎は、もうすぐ中学生になる小宝に希鷹の様子も尋ね、『二人で遊ぶだけでなく、もっと勉強し、中国の将来にも関心をもたなくてはね』と言った。すると小宝は『僕たち、日章旗を見るとすげく悲しくなる。

『僕たちもただうっぶんを晴らしているだけで、日本鬼子なんか倒せない。』  
『当たり前だよ。すべに倒せるも

のじゃないよ。』

翌日、今はフランス租界に移っている学校を案内しながら、希虎は自分たちの闘いについて話した。

『省上中には「学協」という抗日組織があり、多分上海の中学校では一番だ。日本人は上海を占領しているが、蘇州河以南の公共租界とフランス租界は、まだ英仏政府の管理下にある。』

中学・高校にはみなクラス会があり、クラス連合会は進歩勢力に指導されている。国民党の青团はあるが、

まだ大きな勢力でなく、協力して共に闘っている。読書会や授業などで、様々な議論もした。

孫中山先生の「革命未だ成らず。同志はなお努力を！」の呼びかけに  
応え、汪精衛政府成立の日から3日間の授業放棄を決定した。全学の学

生千人が集会を開き、追及された二人の教師は学校を去った。』

『スゴイ！ 僕たちも南京に戻ったら・・・』と勢いづく小宝に、希虎は『君たちには上海租界のような環境はない。やり方がまずければ、すぐに逮捕される。ゆっくりと一日一日積み上げていく困難な仕事なんだ。大衆の自覚も支持もなく、ただ少数の者のみに頼って、考えなしにやってはいけない。慎重にね。』

小宝は自分はまだまだ幼稚だと思った。

## 8 抗日へ、若者たちの決意

1938年の夏、共産党主力の新四軍の部隊はゲリラ戦により各地に根拠地を設けた。秀華ら「七姉妹」は武志華の案内で近くの遊撃区を

訪れた。秀華は興奮してそれを小宝に話した。

林家の店員にも動きがあった。小王と小陸の二人が、南京の対岸の六合に行き、遊撃隊に参加すると伝えた。

小陸は『ねえ秀華、僕は父母が誰かもわからない孤児だと知っているでしょ。10歳で親戚に連れられ南京に来た。幸い大旦那さんに引き取られ、成人まで育てて下さった。御恩は一生忘れない。でも綿糸・綿布は日本軍に統制され、この店も倒産するかもしれない。日本鬼子の残虐行為も随分見て、この国を何とかして救いたい。前は国民党と蒋介石を信じていた。でも国民党では決して我が国を救えないと、思えてきた。愛国的な抗日の店員たちと一緒に新四軍に身を寄せる。彼らが本当に

抗日であるなら、彼らの所でやる。もし理想通りでないなら、自分たちで隊伍を組みゲリラ戦をやる。』と言った。

小王も『妹は日本鬼子に辱められ、自ら命を絶った。母も首を吊って死んだ。僕にはもう家はなく、肉親も失った。祖国が日本鬼子に蹂躪されているのに、一人前の男として何もしないわけにはいかない。遊撃隊に参加すべきだと思う。妹と母の仇を討つ。中国人民の為に仇を討ちに行く。』と。

母と妹が亡くなってからあまりしゃべらず、恨みを心の底にしまっていた小王の言葉に秀華は感動し、幾ばくかのお金を差し出した。

店主の林明卿は彼らの残した手紙を読み、何も言わなかったが、この子たちは見込みがあると思った。

## 9 「団結救国社」の誕生

林家の料理番の李老三の家は六合にあり、彼は二、三ヶ月は家を見合にあり、またお金を届けに帰っていた。戻ってくるのと秀華や小宝に、《老四》《四爺》が農村でどうしているか、農民を手伝って稲を植え、水を汲み、薪を伐るなどして、農民たちが彼を自分の子弟のように思っていることなどを語った。

家には年老いた母一人。新四軍は母をよく世話してくれた。《老四》《四爺》は農民たちの、新四軍に対する愛称であった。母も、彼が新四軍に参加することに賛成した。郷里の傀儡軍も村長も表面は日本鬼子に恰好をつけているが、実際には抗日のために働き、《老四》の指揮に従っているといふ。

(訳註) 華中・華南の根拠地の紅軍が国民党軍の攻撃を避け、長征に出た後、各地の残留部隊が国民党政府の承認を受け、「新四軍」を結成した。

その地区の新四軍幹部の康琴は、南京に教師として来てから、秀華の友人の江少英と武志華の二人を党員に迎えたが、茅山根拠地で学んだことをどう活かすか、必死に考えた。中国共産党は1921年に上海で産声をあげ、南京ではこれまでに8回も委員会が生まれたが、全て失敗、多くの犠牲者を出した。

それは敵の力が強かっただけではなく、あまりにも「左翼的」な方針で、民衆とかけ離れていたこと。周恩来は若者たちが「勉学に励み、仕事に励み、広く友人と交わる」ように提起した。いかに合法的に民衆を団結させるか？ 力を蓄えさせるか？



二人に相談し、中央大学の愛国的青年と金女大付属中の女学生を、一つの抗日地下組織に結集することを提案した。

こうして1941年の夏、《団結救国社》という秘密組織が誕生した。青年たちは康琴が根拠地から持って来た毛沢東の『持久戦論』や艾思奇的『大衆哲学』などの本をむさぼり読み、議論した。また『新知識』というパンフレットを発行し、抗日のニュースを伝えることにした。

秀華は二階の一番奥の部屋に一人で住んでいるので、夜に重慶と延安の放送を聞き、ニュースにして自分で蠟原紙を切った。それを小宝が任建（中央大学の学生）の所に持っていき、任建が小冊子に印刷した。

小宝は姉がラジオを聴きガリ切りしている間、入口で見守った。い

つの間にか眠ってしまう小宝に秀華は濃いお茶を飲ませた。それは彼の習慣になってしまった。

袁倫（同じく中央大学生）も秀華に、くれぐれも慎重に、万に一つの失敗もないようにと言いつけた。もし日本憲兵隊が捜査に来たら、ラジオ、ヤスリ板、蠟原紙をどううまく隠すか、どうやって眠ったふりをするかなど考え、実地訓練もした。この印刷物が日本鬼子に見つかったら死刑になる筈だった。

1942年夏からソ連のスターリングラード攻防戦が始まり、全世界が注目した。秀華は『新知識』の中でこの戦いを追った。小宝の心もそれに従い揺れた。

《団結救国社》のメンバーは、よく郊外遠足に出かけ議論した、小宝も従兄の希鷹と一緒に傍で遊び戯

れ、警戒に当たった。

印刷物をどうやって届けるかは、  
厄介だった。少年二人は「吉田洋行」  
というハンコを彫り、包装し住所を  
書き、その印を押した。

夕食後、大きなカバンを背負った  
二人は、郵便ポストに一個ずつ入れ  
ていき、一人が見張りの役をした。当  
時はまだ郵便局から一度に送るこ  
とができなかったのである。

(へい)